

若手から40年を経て

岡田益己（岩手大学）

本日は、農業気象学会の75周年、おめでとうございます。
この式典の開催にご尽力された 北野会長、安武実行委員長始め実行委員会の
皆さまに感謝申し上げます。
私は、若手の会創設者の一人として、ここでお話しします。
創設当時の若手の会を支えた、原園さん、蔵田さん、大原さん、林さん、大政
さんら、多くの仲間感謝申し上げます。

学会の気風

「若さ」と「広さ」を大切にする

- 若い人が多い
- 研究の幅が広い

そのお陰で

- 仲間が増える
- 様々な研究を知る

農業気象学会は若い人が多い、研究の幅が広いなどと、他学会の方から言われました。この気風に支えられ、のびのびと活動できました。お陰さまで、多くの仲間と知り合い、様々な研究に触れることができました。ありがとうございます。

この間の経緯については、先般の生物と気象に記したので、ご一読ください。

農業気象学の教育と普及

その1

「農業気象学はシャイ」 (内弁慶?)

今日は、その記事で十分に触れなかった「農業気象学の教育と普及」についてお話しします。いずれも私自身、努力が足りなかったと深く反省することです。一つ目は、「農業気象学はシャイ」、言い換えると「内弁慶」でしょうか。

他分野に農業気象の知識が普及していない

- ✓ 無通風の放射よけで気温を測定して温暖化影響試験
- ✓ 波長特性も余弦則も考慮しないセンサーで群落光測定
- ✓ 物理学(光・放射, 熱収支etc)に反した資材・技術



具体的には、「他分野に農業気象の知識が普及していない」と言うことです。この写真は、昨年、ある農業試験場で撮影したものです。

温暖化影響の試験に使うチャンバー内で無通風の放射避けで気温を測っていました。

担当者は、チャンバー内が2~3°C高いと伝えていましたが、その多くは無通風による計測誤差と考えられます。

この他にも、高い光量子センサーを買わなくても、安いフォトセルで群落内の光を計れると言う記述が、生態学の本や論文にあったり、物理的におかした資材や技術が現場で普及しています。

農業気象学の布教活動

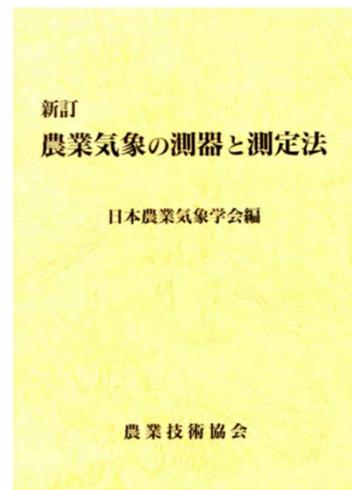
専門外(周辺の科学分野, 農業の現場)

開発途上国

メディアの選択と表現・言葉遣い

大げさな言い方ですが、「農業気象学の布教活動」が必要です。
その際、私たちが遣う言葉にも注意が必要でしょう。

バイブル的な本の外部評価



この2冊は、同分野でバイブル的な本で、私も執筆に関わりました。
しかし他分野の方から、「もっとやさしく書いてもらわないと分からない」と
何度も苦言をいただきました。
身内に通じてても外には通じない言葉があります。

支部が関係した書籍



一方、支部が関与して出版されたこれらの本は、分かりやすいと聞きます。現場で活動されている方々が、執筆しているからだと思います。こうした努力が重要だと思います。

農業気象学の教育と普及

その2

「ドクターGのすすめ」

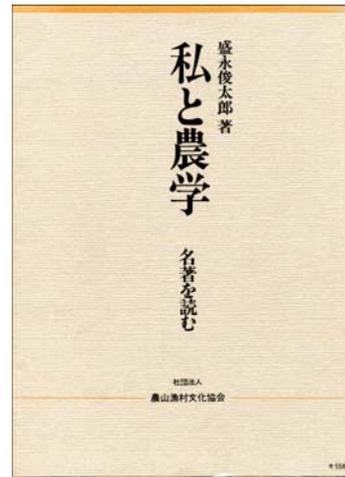
Specialist と Generalist の養成

2番目の話題は、「ドクターGのすすめ」です。
NHKの番組でご存じの方も多いと思いますが、ドクターGは総合診療の医者です。
このような人が、今の農学全体に求められています。
実際、農研機構ではアグロノミスト採用枠がありますが、育成には苦勞されていると推察します。
大学教育で、SとGの養成が求められていますが、Gの養成は非常に難しい状況です。

九州大学名誉教授 盛永俊太郎

「総合の科学」への道

農学は次第次第にいわゆる農の諸学に分科して、それらが農学と農業の発展にめざましい貢献をするにつれて、母体の農学は透明体のように目立たなくなったが、農学自身は今こそ極めて広い総合の科学として、その本領を発揮すべきである。



この問題は、今に始まったことではありません。
当大学の名誉教授盛永先生の著述を集めた本に次のように書かれています。

人間のなりわいの学

— 真理と道理 —

「分解に分解を重ねて真理を探究する学は深く、総合に総合を重ねて道理を追求する学は次元の高いものであると私は思っている」

道理： 道とは行くものであり、「行う」もの
→ 実践的な立場

さらに盛永先生は、農学を「人間のなりわいの学」とし、実践的な立場を取る学問と位置づけています。

東洋の学は思考思索に長じ、 西洋の学は実験観察に宜しい

東洋の学は高く西洋の学は深い。
されど学殖の増進に伴い東洋の学はその視界を益々広大にし、
是に反して西洋の学は愈々その視界が狭隘となる。
従って東洋の学は総合に趣き思考思索に長じ、
是に対して西洋の学は分析に傾き実験観察に宜しい。
されば今日並びに今後の学徒はすべからくその両者の教養に
その努力を惜しんではならない。

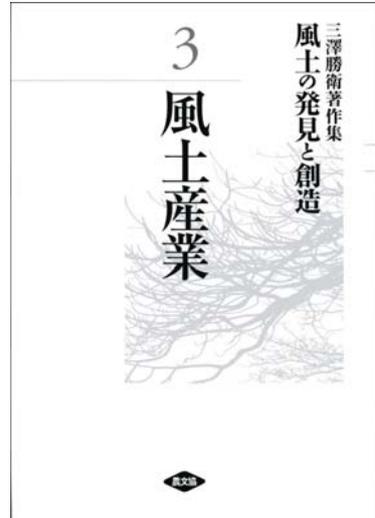
— 三沢勝衛 —

さらに昭和初期の地理教育学者三沢勝衛氏の言葉を紹介しています。

農業と気象との交渉

気象の力をもっと取り入れよう——「農業と気象との交渉」	69
意外に低い気象への関心	69
実際には気象を巧みに活用している	70
地形の微妙なちがいで気象が変わる	71
建物の配置ひとつで好適微気象ができる	72
気象と土壌の相互の関係でとらえる	73
ほしい気象観測と研究の気運	74

中央気象台測候研究会編集「天気と気候」第一巻第二号



三沢氏の著述を集めた本では、気象に関する記述を多く見受けます。これは今の気象庁に当たる機関の刊行物に記したものです。

風土：大地・大気・植生の三位一体

たとえば作物の栽培にしても、単に、気候とか地形とかいうものに分け、そのまた気候にしたところで、気温とか降水量とかに分けて考えていたのでは、どんなに口で適地適作を、適地適業を唱えたところで、実生活にはなんの役にも立たないのである。

一連のなかから次の文章が印象的です。

風土＋(人間)を考える

- ✓ 気象災害・震災対応
- ✓ 温暖化適応
- ✓ 耕地・施設環境の管理・制御

“ハウスの保温技術が、栽植株数を減らして、減収を招く”

L.H. Bailey

「農業教育の目的は農家を良くすることであって、農場ではない」

私は風土には人間やその文化も含まれると考えますが、ここでは敢えて人間を外書きしました。

農業気象学が対応する課題として、次のようなものがあげられます。

いずれも私がかかわってきました。

若い頃にある篤農家にハウスの保温技術を紹介したところ、「それでは減収する」と即答され、大きなショックを覚えました。

私たちの研究で、人の営みを見ていないことに気づかされました。

先の盛永先生の著に、L.H. Baileyの言葉が紹介されています。

1800年代後半にコーネル大学で、農業普及の基礎を作った人の言です。

この教育を研究に置き換えても通じる言葉だと思います。

地域の自然的・人文社会的状況を 踏まえた研究と教育

気象は自然的にも人文社会的にも地域に固有の環境を作り上げます。
その状況を踏まえた研究と教育がこれから重要と考えます。

“期待される成果”通りの結果が出たという研究もよろしいが、何が出てくるか分からないワクワクする研究を目指し、「若さ」と「広さ」を活かしてください。

ますますの発展をお祈りします